

◆坂田寺の調査—第83-9次

1 はじめに

調査は、明日香村大字坂田地内における公共下水道敷設に伴う事前調査である。調査地は、主要地方道桜井・明日香・吉野線から浄土宗金剛寺に向かう村道の道路敷部分で、遺構の保護を目的に、工事掘削の深度や位置の決定材料を得るために確認調査を実施した。

坂田寺は、『扶桑略記』によると司馬達止の高市郡坂田原の草堂に由来するといひ（欽明十三年（552）十月十三日条）、『日本書紀』には鞍部多須奈・鳥による造寺記録が残る。当調査部は、1972年以降、10次に及ぶ調査を行ってきたが、現時点で確認した堂宇はいずれも奈良時代の再建伽藍の一部で、7世紀に遡る堂塔は未発見である。

今回の調査地は、第3次調査区と第4次調査区の間を走る村道部分で、仏堂SB150の東北隅から仏堂背面にあたる部分である。

調査区は、南方の山手に設けたⅠ区と、その北方に設けたⅡ区からなり、幅2～2.8mで長さ67mのS字状に屈曲する調査区を設定した。調査面積はⅠ区38㎡、Ⅱ区102㎡の計140㎡である。

2 遺構

Ⅰ区には顕著な遺構がなく、調査区北端では現路面下2.7mで平坦な花崗岩岩盤に達する。ここでは調査区北東隅から西方へ下降する岩盤の段差が認められたが、これは寺院造営時に東側の尾根裾を直線的に整えた造成とみ

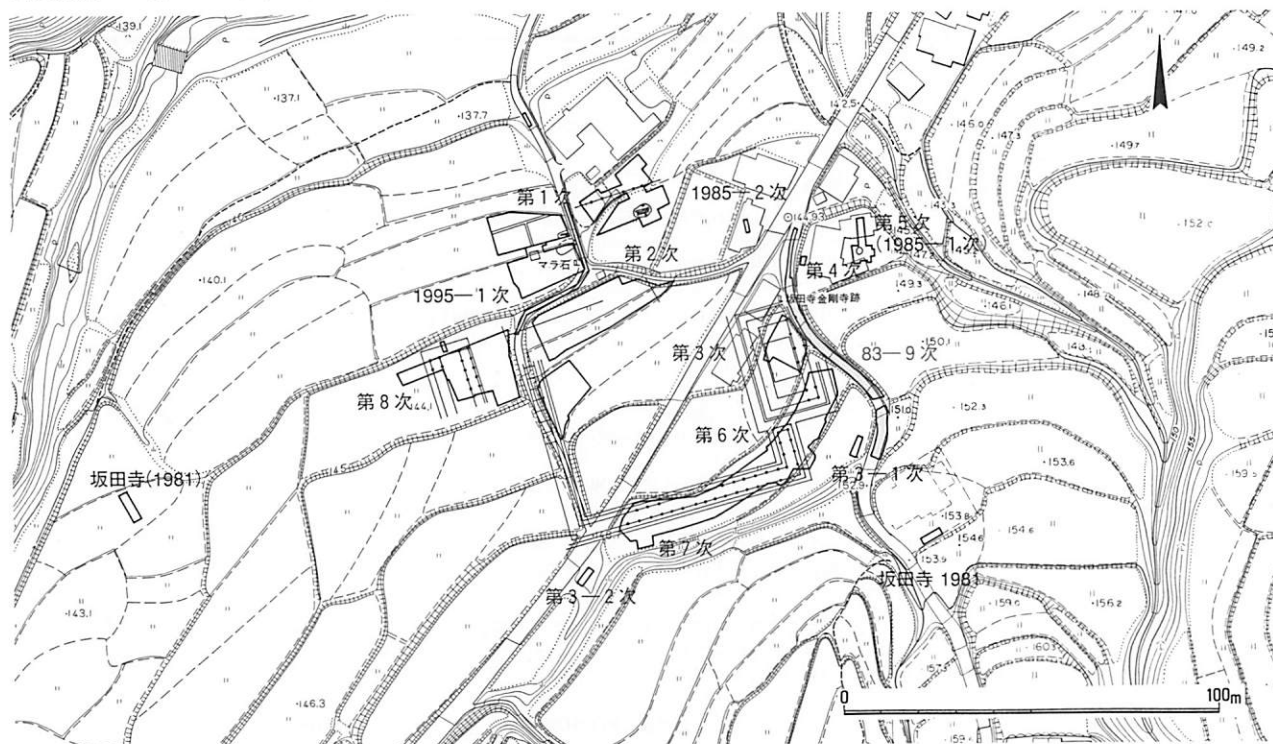


図31 坂田寺調査位置図 1:2000

られる。またⅠ区南端部では、路面下1.3mで斜行する石列と溝を検出した。現在の丘陵裾部の東延長上に位置することから、村道建設以前に存在した南側の丘陵裾部の護岸と排水溝にあたるものと考えられる。

Ⅱ区では調査区の南端で、Ⅰ区から続く尾根の裾部と、それに直交する大溝SD260を検出した。大溝は調査区の東壁から始まって西方に延びる。溝幅3.4m、深さは北側岩盤から1mを測り、第6次調査で検出した仏堂の南雨落溝SD176Aに類似した規模をもつ。両溝は直線的には繋がらないが、SB150基壇の築成時に基幹排水路である南北溝SD177に直交するように掘られた一連の溝であった可能性が高い。SD260の埋土からは、7世紀代の瓦や土器が出土したが、その多くは東方の尾根上から流れ込んだ遺物とみられ、東方尾根上の平坦面に7世紀代の瓦葺き建物の存在を推測できる。

仏堂SB150は、桁行5間・梁間2間の身舎に四面庇がつく礎石建ちの基壇建物である。西を正面とする檜皮葺の南北棟で、棟方向は北で西に約15度振れる。今回、建物の北東隅と基壇北辺を検出したことにより、建物規模や基壇規模が確定した。庇北東隅の礎石は抜き取られていたが、東庇の北第2礎石が現存する。庇の出は従来の想定通り2.68m（9尺）であり、これによってSB150の桁行総長が24.7m（83尺）であることが確定した。

基壇上面には焼土や炭化物が散乱するが、これは建物SB150廃絶後に基壇上で廃材を焼却した10世紀後半代の焼土層と考えられる。礎石は花崗岩を加工し円形柱座を造り出す。礎石抜取穴は、径約1.7m、深さ0.6mで、据付掘形はさらに0.15mほど深い。根石は存在しない。また礎石間には、壁受けの地覆材を抜き取った溝がある。水道管理設溝の壁面に現れた基壇の断面には、明瞭な版築が認められず、20～30cmの厚さで基壇土を8層ほど雑然と積み上げている。

基壇の構造は、東・南辺の調査結果をもとに、花崗岩自然石を並べた二重基壇が全周すると考えてきたが、今回の調査によって、北辺には下成基壇が巡らぬことが明らかになった。基壇化粧も北辺のみ凝灰岩切石を使用するなど、東・南辺とは様相を異にする。おそらく基幹排水路と接する東・南辺のみ、基壇の保護を配慮した重成基壇構造をとるのであろう。北辺の基壇化粧は、幅70cm以上、高さ60cm、厚さ30cmの凝灰岩切石を30cm大の自然

石上に立て並べたもので、羽目石や葛石の存在は確認できなかった。基壇の北側には明瞭な雨落溝がなく、北に向かって下降する地形に雨水を直接たれ流している。礎石心からの基壇の出は1.5m（5尺）で、東・南辺の上成基壇の出（6尺）よりも1尺ほど出が短い。

東辺の二重基壇は、上成・下成ともに花崗岩自然石を化粧材に用いている。下成基壇は長辺50cm前後の石を縦に並べ、上縁に葛石風に30cm大の石を置く。下成基壇上面には拳大から人頭大の石を敷き詰めている。下成基壇幅は65cm前後で、下成基壇高は70cmである。上成基壇の化粧は長辺80～120cm、幅40cm前後の自然石を横長に並べたものである。基壇高は40cmで、東雨落溝底面からの基壇総高は約1.1mを測る。

東雨落溝SD177は、下成基壇の埋没後に数度にわたる掘り直しがなされており、流水と土砂堆積の激しさを物語る。下成基壇の東2mで10～30cm大の自然石を5段積み上げた護岸施設を検出したが、SB150下成基壇までの距離が第6次調査で確認した雨落溝SD176B・177Bと等距離であるため、基壇築成当初の雨落溝の東岸にあたると思われる。SD177の東岸はこの護岸からさらに東に広がり、溝の最大幅は3.4mを測る。またSD177は、SB150廃材焼却時の炭化物層の堆積状況からみて、10世紀後半代にはほぼ埋没していたことが知られる。SD177の東は一段高いテラスとなり、一面に拳大のバラスが敷かれている。このテラスはⅡ区南端で確認した東方の尾根の立ち上がりや比高差などからみて、幅9m前後で東方の尾根裾を巡り、基壇建物のある第4・5次調査地に至るものと考えられる。なおバラス上には銅滓が多量に投棄されており、近隣に銅遺構の存在が推測される。

3 出土遺物

瓦類のほか、土器、金属製品、木製品が出土した。瓦類には軒瓦、丸・平瓦、切巔斗瓦、塼仏、塼がある。

軒丸瓦 坂田寺出土の軒丸瓦は、これまで10型式21種が知られているが、今回はこのうち1C・6A・7A・21Aが各1点、6Bが2点出土した。このうち1Cは、中房部分が出土し、蓮子を2重に配置することを確認した。『概報22』で桜花形の素弁10弁蓮華紋軒丸瓦1型式をA～Eに細分したが、これに訂正の要が生じたので今回報告する（図32-4～7）。1A：弁の盛り上がりや、先端の反

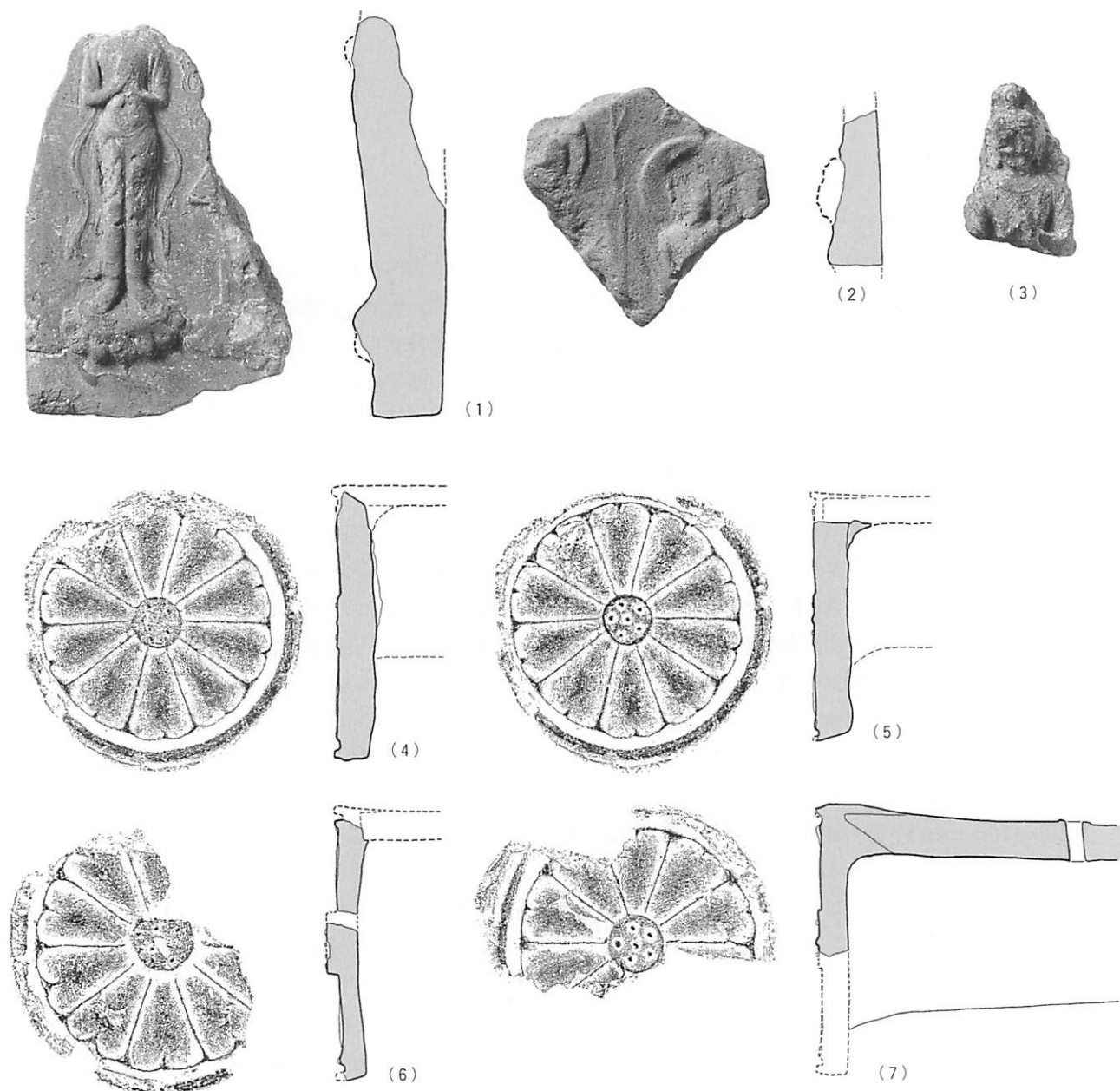


図32 坂田寺出土 埴仏(1~3) 軒丸瓦(4~7) 1:4

転が小さい。中房は平板で、蓮子は1+5。瓦範の傷みがほとんどないものでは、丸瓦先端の凹面だけを削って接合する(4)が、全体に傷が進んだものでは加工しないものを接合する(5)。1B:弁の盛り上がり大きい。『概報22』以降、良好な資料の出土はなく、蓮子数不明。1C:弁先端の反転が大きく、中房は高い。正確な数は明らかでないが、蓮子が2重に巡る。中心蓮子は割れのため不明。丸瓦先端を加工しないものを接合(6)。なお以前に1Eと報告したものは、1Cとの同範を確認したため削除する。1D:弁の盛り上がりや、先端の反転がもっとも小さい。中房はやや突出し、蓮子は1+5。丸瓦先端の凹面もしくは凸面いずれかを削って接合する(7)。

軒平瓦 101Aが3点出土した。

丸・平瓦 丸瓦608点(305.9kg)、平瓦2,878点(481.9kg)が出土したが、大部分が7世紀代のもので、奈良時代以

降の一枚造り平瓦は162点(64.4kg)しかない。

埴仏 川原寺や橘寺と同範の方形三尊埴仏A(大脇潔「埴仏と押出仏の同原型資料-夏見廃寺の埴仏を中心として-」『MUSEUM』418、1986。)の左脇侍菩薩の首から上を残す部分(3)が出土。6次調査で同型式の右脇侍菩薩の首から下の破片(1)、3次調査で菩薩頭部の小片(2)が出土している。菩薩頭部片は全体に立体的な表現をとる。3点とも仏堂とその周辺から出土。金属製品には鉄釘や鋸、銅鉾、金銅製飾り金具がある。またSD177から、表面に唐草の蜜陀絵が描かれた黒漆塗り板材が出土した。厨子もしくは櫃の一部とみられる。

4 まとめ

今回の調査は道路敷に限定された調査区ではあったが、奈良時代の仏堂SB150の北東隅付近の様子が明らかになった。調査によって建物規模や基壇規模が確定した

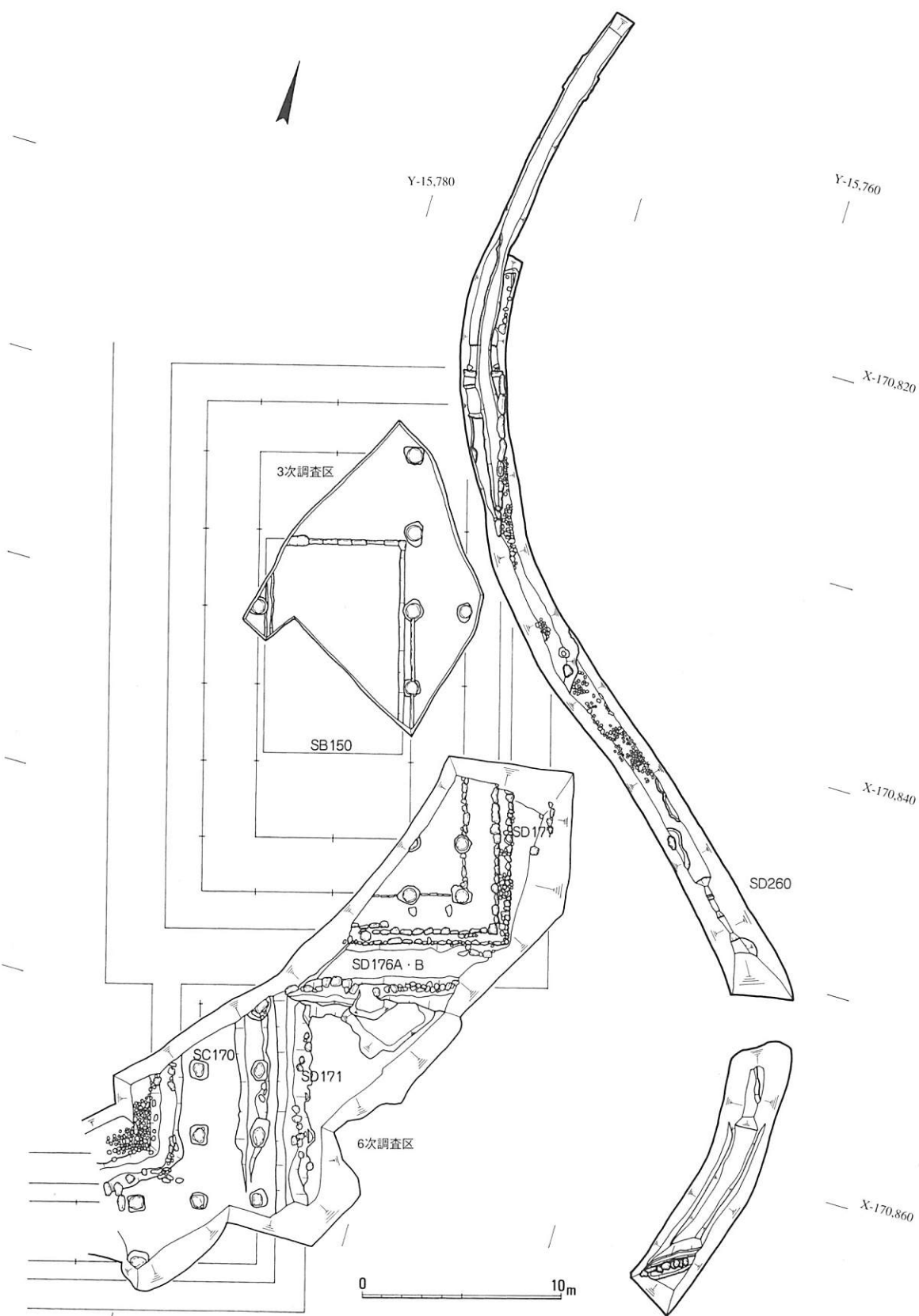


図33 第83-9次 坂田寺の調査遺構図 1 : 300

が、基壇北辺は重成基壇ではなく、基壇化粧に凝灰岩切石を用いるなど、東・南辺とは大きく様相を異にする状況が明らかになった。これは西を正面とする仏堂の背面、すなわち旧地形の谷に雨落ち溝兼用の基幹の排水路を配したため、流水の影響を強く受ける南・東辺のみ下成基

壇を築いて基壇を保護したものと考えられる。

また瓦や土器の出土状況から、東方の尾根上の平坦面に創建期の瓦葺き建物が存在する可能性が高まった。奈良時代以前の坂田寺伽藍の解明が今後の大きな調査課題となろう。
(松村恵司 瓦類；伊藤敬太郎)